

もう一度「食」を考えてみます！

企画委員

下谷栄治

我が牧場クラブの活動テーマの一つが「食」ですが、またその「食」と「安全」の問題が起きてしまいました。法的整備上の疑問や商道德上の問題に就いては、敢えて述べることは避けたいと思います。一昨年の夏の講演会を思い出しています。実はそのご講演を戴いた中村信吾青森中央学院大学学長が先日ご逝去されました。誠に残念でなりません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

故中村学長が強調されていたことの一つが、食事のあり方であったと思います。則ち、家族と一緒に且つ和やかに食事をする事の大切さです。そしてその食事は外食や店屋物ではなく、お母さんまたは家族の誰かの手を掛けたものであることです。食事を通して子供は親の有り難さを感じ、親は子供に有形無形の愛を注ぐ幸せを感じ、双方が親子の絆を確認することで生物学的栄養摂取を超えて、心の栄養を蓄えて人格を形成していくこととなります。更に祖父母が揃っていれば、三世代に亘る代え難い修養の場となることでしょう。その様な家庭環境で育った子供は、また其の子供へ受け継ぎ、末代まで素晴らしい系統（血統）文化が継承されることでしょう。

潤沢でない乍らも、何とか生計が立っているにも係わらず、家計を助けることを大義に母親が外に働きに出る。しばらくすると、母親は働くことの金看板を盾に調理の時間をサボる様になり、出来合の総菜で賄おうとする様になる。そして何時しか店屋物で取り繕うとする様になる。場合によっては子供の弁当さえ同様の扱いで“良い”とする様になる。行き着くところ、留守番をしている子供（所謂鍵っ子）にお金を渡して、子供だけの食事となってしまう。身体の栄養バランスもさること乍ら、心の栄養バランスも崩れた食事を強いる様になってしまいます。本末転倒の負の悪循環です。この様な環境で育った子供がどの様な人生を送ることになるかは想像に難くありません。

片親家庭や、他のやむを得ない事情でそうせざるを得ない場合を言っているのではありません。寧ろその様な場合は、苦勞して育ててくれている親の背中を見て親の心を感じ取り、きっと立派な子供が育つことでしょう。私が子供の頃は、否今現在でもその様に立派に子供を育てていらっしゃる素晴らしい親御さんが幾人もおられます。

焼き肉屋さんで家族と一緒に食事をする事を決して否定するものではありませんが、報道で知る限りでは、被害者の多くが度々その店で生肉（ユッケ）を食べていたというこの様です。

家族揃っての頻繁な外食は一見微笑ましく、如何にも家族の心の絆が強くなる様に親としての責任を果たしているが如く見えますが、これは大いなる親の錯覚であり、親の責任放棄の隠れ蓑であり、逆に家族関係破壊の一里塚になり得ると考えるのは私の独善でしょうか。

この様に書いている私自身は、人に語れる様な食生活を送っているとは決して言えません。語るに落ちる前にペンを置かせて戴きます。